

羽村取水堰 (1)

投渡堰 (なげわたしせき)

取水堰は投渡堰と固定堰でつくられている。第一水門(寄りの投渡堰は、4本の石造りの橋台で3つに分かれ、鉄製の桁(けた)でつながれている。それぞれに13本の丸太を立て、この丸太を支えに横に木くいを並べさらに隙間を粗朶(そだ・木の枝)や砂利などで埋めている。普通、水はこの堰を越えて流れているが、大雨などで多摩川が増水したときは桁受け丸太を折り、ピンを外すと横に渡した鉄の桁が水圧で押されて、堰を支えた丸太や粗朶などが全て流れ去り、青い鉄の桁だけが残る(投渡木払い・ナギバライ)

左岸寄りの第1投渡堰から払われる。水位の変化を見ながら、第2堰や第3堰も払う。後、水量が下がれば再び堰を再構築(仕付け)する。1つの堰の仕付け費用は約100万円。仕付けは専門業者が担当している。

この構造は江戸時代の創設時から殆ど同じである。当時の堰は2つに分かれていた。石造りの橋台に以前は丸太と蛇籠でつくられた「弁慶杵」を用い、鉄製の桁の部分は「なぎ」と呼ばれた長さ、11.8mと10mのケヤキの丸太が使われていた。橋台は明治15年に今の石造りに改造され、明治42年にはケヤキ丸太が鉄製の桁になり、橋台の上に作業橋が作られた。

固定堰・筏通場・魚道

それまでは杵や蛇籠で作られていた固定堰が明治38年ごろ投渡堰から丸山下に至る330間(約594m)がコンクリート製薄鉄型に造り替えられた。このとき古くからあった筏通場も投渡堰より3間おいて2間中に造りかえられた。

また、筏通場より更に川の中央部の固定堰に2002年5月魚道が新たに完成した。



払われた投渡堰・仕付け(再構築作業)が始まる

羽村取水堰 (2)

第一水門

現在の第一水門は大正13年(1924)に増設された上流側のコンクリート(表面は花崗岩)製の新水門(4門・12口)と、下流側の明治33年(1900)に造られたレンガ(表面は玉石張り製)の旧水門(5門)とがある。

最大取水能力は9つの水門を全開すると毎秒22トンとなる。昭和35年に旧、39年に新水門が電動開閉式となる。

近くの羽村郷土博物館に江戸時代に使われた木製水門の復元模型と旧水門の模型が展示されている。

第二水門

この水門で第一水門で取り入れた多摩川の水量を調節する。最近まで大正3年6月に設置された板を抜き差しして、水量を手動で調節する水門が使われていたが、平成14年3月、すぐ下流に電動式の新水門が完成した。

余分な水は水門手前の小吐水門から多摩川本流へと戻される。なお1992年以降、地元福生市などの協定により常時毎秒2トン以上の水量を下流に流している。



第三水門付近 ここから流れは3方向に分かれる(左は地下導水路入り口)

第三水門

第一水門、第二水門を経て、取水された多摩川の水は、ここで流木やゴミなどが除かれ、三つの流れに分けられる。

一つは、奥多摩街道側の第三水門。この水門(12門は大正13年に竣工)から地下の羽村村山導水路に入り、約8.6キロ離れた村山・山口貯水池(多摩湖・狭山湖)へと送られる。

また一つは、多摩川側にある羽村導水ポンプ所(1979年完成)に導かれる。ここから内径1.35mの地下導水管を経て北西約3.1キロ上流にある小作浄水場に圧送されている。この導水管は羽村橋の上流側で上水を横断している。

残りの流れが別の水門(5門)を通り玉川上水となり、小平監視所まで開渠で流れ、さらに地下導水管に入り東村山浄水場へと続く。いずれも水道原水として今でも使われている。

玉川上水ワンプォイントガイド No. 14

散歩ガイド (羽村駅から拝島駅)



羽村取水堰・第一水門 (左側旧水門、右側新水門)

シリーズ 玉川上水ワンプォイントガイド

1	玉川上水の概要	2	玉川上水の分水
3	玉川上水の分水・小平編	4	玉川上水と小平周辺の新田開発
5	玉川上水の橋	6	玉川上水の水車
7	玉川上水の通船・船溜り	8	玉川上水の樹木・野草・野鳥
9	玉川上水と小金井サクラ	10	玉川上水あれこれ
11	玉川上水お勤め散歩ガイド		
12	玉川上水散歩ガイド		
13	玉川上水散歩ガイド		

テーマ

No	14	玉川上水散歩ガイド 羽村駅から拝島駅
	15	玉川上水散歩ガイド 拝島駅から玉川上水駅
	16	玉川上水散歩ガイド 三鷹駅から富士見ヶ丘駅
	17	玉川上水散歩ガイド 富士見ヶ丘駅から代田橋駅
	18	玉川上水散歩ガイド 代田橋駅から新宿御苑駅
	19	小平市内の用水分岐水門・分岐口めぐり
	20	小平市内の石橋供養塔めぐり
	発行 2009年4月 No1~No13発行済	

発行 小平・玉川上水再々発見の会
E-mail tamagawasaisai@yahoo.co.jp
代表 庄司徳治